

Bericht aus Deutschland

田口理穂 * ドイツのエコあれこれ
No. 28



ドイツにはいくつかチェーンのドラッグストアがあるが、その中の一番人気はディーエム（以下dm）である。顧客が買い物しやすい店づくりはもちろん、持続可能性や環境に配慮し、社員のライフ・ワークバランスを重視している。

利益の最大化を目指さない異色の存在だが、そのコンセプトによってドイツ最大のドラッグストアに成長した。

その秘訣は、シュタイナー教育で知られるルドルフ・シュタイナー（1861～1925年）が発展させた人智学（アントポロゾフィー）である。人智学を意味するアントポロゾフィーはギリシア語のアントローポス（人間）とソフィア（知恵）を合わせた造語。

シュタイナーはすべての労働や経済活動は同等に価値があり、経済活動から生じた利益は芸術活動や教育、社会に還元すべきだと考えた。その考えに共鳴したゲツツ・ウエルナーは1973年、ドイツ南部でdmを起業。ウエルナーは利益の最小化を求め、売り上げより職場の雰囲気が大事と考えた。人件費は経営を圧迫するコストではなく、「クリエイティブ費目」であり「社員の収入」と捉えている。

シュタイナー学校を運営するのは利益追及のためでない。企業経営も同じなのである。ウエルナーは2005年に自分の

シュタイナーの人智学に基づいて起業

ドラッグストア

所有権利をディーエム・ウエルナー財団に移譲。現在は創設者の息子クリストフ・ウエルナーが事業を受け継いでいる。

dmは2010年からドイツ最大のドラッグストアとなり、現在は国内に2069店舗を構え、約4万3000人が働いている。ほかにもクロアチアやルーマニアなど東欧を中心におく12カ国に進出し、約3900店舗で6万6000人が働いている。2020年度（2021年9月末締め）の売り上げは、前年比5.6%増で年々成長している。

私もときどき出かけ、食器洗い機用洗剤やシャンプー、ちり紙など購入している。カップやポット、テーブルクロスなど日用品をはじめ、季節に合わせた雑貨も楽しい（写真はクリスマスに向け雑貨が並ぶ店内）。価格は手頃であり、従業員も親切である（ドイツでは普通、無愛想）。

赤ちゃんのオムツ替えスペースではdmプライベートブランドのオムツが無料で使える。ドイツでは珍しく、無料で水が飲めるスペースもある。店のモットーは「ここでは私は人間。ここで買い物する」である。

店舗の平均売り場面積は約600平方メートルで、広すぎず狭すぎず、ゆったりとしている印象である。毎年約3500人の職業訓練性を受け入れ、企業としての社会的責任を果たしている。

環境にも配慮し、2014年から液体石



鹹やシャンプー、歯磨き粉などの自社ブランド製品でマイクロプラスチックの使用を減らすべく順次、自然素材に置き換えてきた。同じく自社製品のナチュラルコスメ（自然化粧品）・アルヴェルデでは基礎化粧品から口紅やパウダー、アイラインまで幅広く取り揃え、顔用クリームや口紅が400円とお値打ち価格で親しまれている。パスタやクッキー、トマトソース、シリアル、コーヒー豆など保存のきく食品ではすでに1986年からオーガニック食品も扱い、時代を先取りしてきた。

最近、気候保護の観点からCO₂を新技術でエタノールにリサイクルし、それを包装材として使い始めた。例えば台所用洗剤のプラスチック容器の30%をCO₂から作り出しているという。今はまだ始まったばかりだが、徐々に使用する製品を増やして行く予定である。

このように顧客と社員を第一とする店づくりの根幹に、社会全体について考えを巡らせたシュタイナーの人智学がある。グローバル化のひずみが顕著となっている今日、「自社ファースト」でない企業哲学が結果的には最高の業績を生み出しているのは何を意味しているのだろうか。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

AKIRA の 成長記録

「14歳の息子が再来年日本に留学したがっているから、日本語教師を探している」という話が偶然、舞い込んできました。教えるのは得意ではないのですが、その子が明と同じ14

歳ということで興味が湧きました。どうやらカール君は明の隣のクラスで、週二回バスケットボールクラブで一緒に練習していることが判明。子ども同士お互い好印象を持っているようなので、来週から一緒に授業をすることにしました。

でも明は日本語が母国語で、カール君は漫画好きだけれど、ひらがな、カタカナ、漢字があることも知らない超初心者。うまくいくのかとちょっと心配ですが、明は「ぼくもモチベー

ションが上がるし、他の子が日本語を上手になるのを見るのはうれしい」とのこと。いつも勉強を嫌がる明ですが、顔合わせに行った時、自ら日本語について説明し、やる気満々でした。カール君は先日学校での留学説明会の後「日本に行きたい！」と急に言いだし、親をびっくりさせたそう。明も「オーストラリアに行きたい！」と言い出し私をびっくりさせました。

「オーストラリアに半年留学したいなら、2ヶ月日本の学校に行くのが条件」と言ったら、しぶしぶ承諾。コロナのせいで去年も今年も里帰りできなかつたが、来年はなんとしても帰りたい。来年中学3年生になるので、小学校時代のお友達ともう一度机を並べて勉強できる最後のチャンスです。